

子供の遊びを見つつ、職業がら、教育のこと、ことにむつかしい一般教育のことを考えるのであるが、何をどう考えたか、大し

たことでもなく、ありきたりになりそうで、恥ずかしい思いもするので、以上でこの稿を終えることとする。

## あたりまえのこと!?

「教育」という言葉のもつ意味は何だろうか。「教え」「育む」という意味なのだろうが、「教育」と綴ると、いかにも「教える」ことだけ前面に出て、「育む」ことはとかく軽視されるという印象をもつ。また「教育」という以上、知育、徳育、体育など全人的な教育が実施されるのが常識と思うが、とかく「知育」先行になり、「教育」は「狭育」になっているのではないかと疑ってみたいりする。その結果、「教育」の「教」の字が、「狭」や「狂」の字に変化して、「狭育」とか「狂育」になりかねない恐怖を感じたりする。

そもそも「教育」は幼児期から青年期までの年令に属する人口にのみ限られてよいものだろうか。日本の人口全体を見れば、明らかに青年期を過ぎた年令層を包含している。年令的にひねたそれらの人口層を、我々は「大人」と普通呼んでいるが、「大人」はもはや「教育」される義務は全然ないだろうか。「大人」というのは、幼稚園児、小学生、中学生、高校生、大学生などとは異なり、「教育」しにくい種族であ

る。だから、易きに就くのが、人間の習性とするなら、被教育者の範囲から「大人」は除外するのがむしろ賢明であると言えよう。かくて「大人」たちは新憲法が高らかに唱う国民の教育権を享受する権利を失っているわけである。

日本人は“顔のない民族”であるそうだが、確かにこの指摘は核心を衝いているし、極めて重要な意味をもっていると思う。イギリスにはチャーチル、アメリカにはルーズベルト、ソ連にはスターリン、フランスにはドゴール、ドイツにはアデナウアー、アラブにはナセル、インドにはネール、等々列挙するまでもなく、それぞれ自己の“顔”をもっている。日本民族が自己の“顔”をもたない「不幸」は、日本の「大人」たちにはむしろ「幸福」なことなのかもしれない。それは「大人」たちを「教育」する人物がいなくことであるから。それは同時に、「教育」は「大人」たちを含まないこと、「教育」は「学校」だけで行われるべきことというのがあたりまえのことになっているのである。

日本の「教育」が「狹育」や「狂育」に落ち込むことから救い出す方法は、「一般」教育を強く叫ぶ以外に途はない。戦後の教育改革において「一般」教育が採り入れられ「狹育」や「狂育」を是正する理念として制度的に実現されていることは、画期的であると言わねばなるまい。日本の教育が「狹育」的偏向を性格として帯びているとしたら、そのような風土の中で進められる「専門」教育というものは、ますます一点豪華主義的性格を強くせざるを得まい。そのような教育を受けた「大人」たちが、例えばGNP至上主義を信奉したら、GNP至上主義が引き起す物価騰貴や公害などは全く無視することにもなりかねない。それはまた「狹育」を受けた結果でもあると言えるかもしれない。

日本の「大人」たちは「教育」から解放されている。その結果、日本列島は物価騰貴と水銀汚染をはじめ公害にとっぶりつか

ってしまっている。そのような汚染列島を創り出したのは「大人」以外にはないのである。だから「教育」されるべきは、「青少年」ではなく、むしろ「大人」たちである。しかれば誰が「大人」を「教育」するのか。“顔のない民族”と呼ばれる日本は、その意味でまことに「不幸」である。「一般」教育は、大学生に対してのみならず、むしろ「大人」たちにこそ必要不可欠である。なぜなら「大人」たちこそ、物価騰貴と環境破壊によって日本民族を破滅に導きつつある元兇だからである。今日、「教育」されるべきは「大人」であって「青少年」ではない。この「非常識」があたりまえのことにならない限り、GNP世界第三位を誇る日本は、「水銀列島」として民族の破滅を免がれ難いのではないか。「大人」に「鈴」をつけることこそ、いま日本の「教育」が要求されている最も緊急にして、最も重要な課題なのではあるまいか。